

授業マネジメントの勘どころ： 話し方の勘どころ 【番外編】 ～Speaking力を伸ばすあの手、この手①～

田邊 祐司 Tanabe Yuji (専修大学)

本稿のために、ベテラン教師3人と研究会を開いていますが、今日の会は「英語は英語で」の根底にある教師の英語スピーキング力をめぐる話題で盛り上がりました。内容は刺激のかつ有益で、きっと若い先生たちの参考になるはずです。そこで今回は「話し方の勘どころ」の番外編として、英語スピーキングにつながる各人のシークレット(?)を座談会の形で数回に分けてお裾分けをすることにしました(見出しは割愛しました)。

田邊: まずは日頃から授業の9割以上を英語で進めているB先生から口火を切ってもらいます。スピーキング力を伸ばすには、コンスタントなinputが重要になります。どんなに忙しくてもこれだけは続けているという方法を具体的に話してもらえますか。

B先生: 「英語の授業は英語で」ということで、最近「教室英語表現集」や「クラスルーム・イングリッシュ」, さらに、驚いたことに「大学教員のための教室英語表現」といった本まで相次いで出版されています。確かにこうした「出来合いの表現集」からのリスト・ラーニングは「あり」でしょう。でも私は、自身の生活、特に授業の中から表現を収集することを優先しています。そのため、言い古されたことばではありますが、「これを英語ではどう表現するのか」ということをいつも念頭に置き、実践をしてきました。

この手法での最大のツールは、やはり和英辞書とメモ帳です。たまたま手元に田邊先生から勧められた『ニューアンカー和英辞典』(学習研究社)があります。「英語では?」と思ったときに調べるため、常に携帯しているのです。

先日の授業でこんなことがありました。サッカー

部のイガグリ頭の生徒が膝のかさぶたを触っているのを見て、「かさぶたをかくとかえって治りが遅くなるぞ。」と言いたかったのですが、それが咄嗟には出てきませんでした(the scabは想起できたのですが…)。そこで、「Please give me a sec!」と言いながら、『アンカー』を引いてみました。すると、「The cut won't heal if you pick at the scab.」という例文があるではないですか。「かく」を“pick at”と言うとは…。辞書に一本とられた瞬間でした。生徒にはもちろんこの用例を伝えました。授業後には、「The scab has come off.」(かさぶたが取れた。)などの用例を辞書やネットで探り、それらをメモ帳に残しました。

このように、私のスピーキング力向上の源泉は授業です。授業の中でわき上がった疑問を辞書とメモ帳で押さえ、授業で使いながら自分のスピーキング力の一部にしていくというものです。

C先生: 実に先生らしい手法ですね。私も、クラスルーム定型表現を暗記すればそれで事足りるというものではないと思います。教室では何が起るか、まったくわかりません。表現集だけで乗り切れるようなものではないですよ。そのために私も和英とメモ帳の連携によるinputを続けています。遠回りのように思えますが、実は一番、着実にスピーキング力が伸びるやり方だと信じています。

私は、生徒からの質問(ときには挑戦?)もさることながら、sourceはALTに求めています。彼らの発話を集めて、メモに残すのがシークレットといえば、そうなのかもしれません。

ある授業のときでした。女性のALTの先生に、生徒から理想の男性について質問が立て続けにあったときのこと。彼女が“I have it up to here.”

と言ったのです。もちろん笑いながらですが…これは「もうたくさん。もうガマンできない。」という意味ですが、「ああ、自分だったら“That's enough.”もしくは、“I've had enough.”と言ってしまふな」と思ったことを覚えています。もちろんメモへのentryは忘れませんでした。

このように、ALTから集めた英語表現を書き込んだ小型のメモ帳は優に400冊を越えました。歴代のALTからは「メモ魔」と畏れられるまでに成長したのです(笑)。誰が何と言おうと(dig my heels inというイディオムもメモにあり)、英語教師である限り、私はこのメモを続けていきます。そしてそれを教室へと還元し続けていきます。日頃から細やかな表現のストックがあってこそ、本当の意味で英語での授業が成り立ち、生徒への正しいinputにもなるのではないのでしょうか。

A先生: まったくもって同感です。どんなに時代が進んでも、やはり「辞書—メモ」はここにおられる先生方は全員やっておられる手法ですよ。まったくシークレットではない!(笑)いや、もはやそんなことすらやっていない先生は、英語のプロではないとまで言ってもいいかもしれません。

わたしもお勧めをひとつ。それは『新クラウン和英辞典』(三省堂)を熟読することです。田邊先生の「辞書を愛でる」に感動し、英文の大家、故山田和男が編んだこの辞書をかじるほど愛でできました(笑)。秀逸なのが、基本動詞と前置詞を中心とした巻末の慣用語法表です。「及ぶ、達する、入る」を意味するrunの項目を見ますと、山田氏が英米の新聞、雑誌、小説などから集めた用例がちりばめられています。「その手紙は6頁になった」は、“The letter ran to six pages.”、「8月が9月になった」は“August ran into September.”という具合に、runという基本語の表現範囲が広いことを教えてくれます。

正直、中には少し手垢の付き過ぎた表現もありますが、英語の口頭表現の核心を衝いたこの辞書は昔、英検1級や国連英検特A級を突破したときの自分のスピーキング力の元になったものでした(Without hoping to sound arrogant!)。今の人には山田氏の『英作文研究:方法と実践』(文建書房)

はぜひ一度、目を通して欲しいものです。

B先生: 基本動詞や、基本動詞と前置詞・副詞が連結した句動詞(Phrasal Verb)は多量にinputしておく必要がありますね。さもないと、naturalでidiomaticな英語のシャワーを生徒にあびせることはできないと思います。

先般、英語部会の研究授業に行ってきましたが、とある授業者が、“Please distribute the handouts.”と言っておられました。生徒の方は言われた通りプリントを後ろに配っていましたが、これは“pass out”や“give out”の方がずっとnaturalですよ(例:Please pass out these handouts to everyone.)。

C先生: スピーキング力向上のために行っていることをもうひとつ。授業のdiscourseは、「指示」「発問」「説明」「活動」, さらには「つなぎ」や「ほめ言葉」などで構成されますが、私自身この中で一番、難しいのが英語での「説明」だと思っています。要点を衝き、中学生でもわかるsimpleでplainな英語で、情報を伝えるのは容易ではありません。

こうしたことがスムーズにできるようになるにはトレーニングが必要です。そのために一番重宝したのが、LDOCEやCOBUILDなどの英英辞典です。そこで先輩の先生に教わったのが、見出し語を見た瞬間に、その定義を口頭で言うこと、そして逆に定義文を聞いて(同僚やALTに読んでもらう)、その元の単語を当てるという練習でした。

前者で思い出すのが、stapler(ホチキス)です。LDOCEには“a tool used for putting staples into paper”と定義してあります。toolまでは出てくるのですが、for以下の“putting staples into paper”などはお手上げでした。ネイティブのこうした置き換えの語感をつかむのに時間がかかりました。

初任の年から10年間はこうした定義練習を繰り返しました。これも地道な方法かも知れませんが、その練習を通して、英語は、大切な情報を先に伝える言語なんだということが実感でき、plainな言葉への置き換えをどう行うかの「勘」も鍛えられたと思います。それが私のシークレットなのかもしれません。(To be continued)